理事長

躍動感ある中大に

巻頭対談

中央大学理事長 阿部三郎氏

あべ さぶろう 1950年3月中央大学法学部卒。54年弁護士登録、東京弁護士会に入会。84年4月から85年3月まで東京弁護士会会長、さらに92年4月から94年3月までは日本弁護士連合会会長を努めた。96年3月オウム真理教破産管財人に就任。

99年5月学校法人中央大学理事長、2000年2月学校法人中央大学総長職務代行を兼務、現在に至る。

中央大学商学部長 北村敬子氏

きたむら けいこ 1968年3月中央大学商学部会計学科卒、同大学院商学研究科修士課程終了。70年4月同商学部助手、81年4月商学部教授（会計学専攻）、97年11月から中央大学商学部長。

今年夏まで司法制度改革審議会委員を努めたほか、金融庁企業会計審議会委員、国税審議会（国税審査会担当）委員など各政府委員を兼務、現在に至る。

北村教授：きょうのメーンテーマに入ります前に、まず、われわれ教学側もそうですし、学生もそうだと思うのですが、阿部理事長っていう方は、一体どういう方なんだろうというのが非常に関心があるところでして、プライベートなことに及んでしまうかもしれないんですが、その点をまずお伺いしたいと思います。理事長はいま、どなたとお住まいでいらっしゃるんですか。

阿部理事長：家内と住んでいます。子供は3人とも独立して、みんな家を出ています。長男は昭和30年生まれだから46歳、その下の娘が2歳違って44歳、その下が次男、3歳違いの41歳です。

北村：すると、私なんかもそうですけれども、夫婦お2人の生活というのはいかがでしょうか。

阿部：でもね。このほかに犬が1匹、猫が1匹、小さな亀が1匹おりますし、それに大きな金魚が1匹おります。結構、楽しいですよ。

北村：奥様はご結婚なさった時からお家にいらっしゃるんですね。ご自宅で何かやっていらっしゃるんですか。

阿部：家事の合い間に私の法律事務所の会計をやっているんですよ。事務所では、現金出納、その出入り関係の書類だけをまとめて、1週間にいっぺん家内の方へ送ると、家内がそれを見て伝票を書き、仕訳けして、帳簿つけて、会計士事務所まで送るという仕事をしています。

北村：そうですか。奥様は、そちらの方のご専門の何か勉強をやっていらしたんですか。

阿部：大学を出て、簿記学校へ通ったようです。そのような会計を必要とする家業で、結婚するまで実家の方で経理をやっていたようです。

北村：奥様とはどのような形で、ご結婚されたんですか。

阿部：両方の親同士が決めた結婚でした。私の実家が海産物製造業を、家

内の実家が海産物問屋を経営しており、かなり古くから取引きがあったんです。そこで親同士が話をしているうちに、「うちの息子が司法試験に受かった」という話が出て、「うちの娘もこうなっている。では、2 人を……」ということで話が決まったようです。

北村：奥様はどちらの方なんですか？

阿部：千葉の船橋です。学校は東京女子大学です。

北村：先生は大学に入られたときは法学部ではないんですよね。

阿部：旧制専門部の経済学科なんです。あのころは、まさに戦争たけなわで、経済専門科目の受講も満足にできなかったですよね。簿記なども私の田舎の商業学校の方がはるかにレベルが高かったでしたよね。

北村：卒業なさってから、法学部に入り直された。

阿部：専門部経済科を卒業したのが 22 年の春だったんです。前年の 21 年の 11 月 3 日に新憲法が公布されました。それで、翌年 22 年 5 月に施行されたんです。その時に憲法を見て、「これからは法律の時代だ。それなら法科の中央大学だ」と決意しました。

新憲法に“大感激”

北村：前の憲法とずいぶん違っていたと思うのですが、やっぱりその時の衝撃というか、感動っていうのはすごっかったのでしょうか。

阿部：基本的人権の条項について、非常に感動したんですよね。前文と、それから基本的人権条項、つまり、中央大学に入った昭和 19 年の 4 月という時期は、主として軍事教練であり、そしてまた、時によっては、まさに隷属服従の時代で、学徒勤労動員ということで工場勤務ということの連続で、まったく人権無視。その後、20 年の 6 月、つまり専門部 2 年生の時に軍隊に召集されて、初年兵として厳しい教育を受けました。軍隊のしごきというのは大変なもので、人権無視そのもの。そういったことを経験しているだけに、新憲法がいかにも鮮やかに感じられました。その意味ではむしろ、他律、服従、隷属の時代から、まさに自律、自由、自主の時代と、世の中が変わったことを身をもって感じましたね。

北村：今までは、服従というような形だったのが、自律っていうような形に。ちょうど先生なんかは青春の真っ只中でいらっしゃったと思うんですが、その時にパッと変われるものなのでしょうか。

阿部：変われましたね。

北村：すごいですね。待ってましたという感じなのですか。

阿部：そうです。世の中がパッと明るくなった感じ、そういう思いでしたね。

北村：その時っていうのは、大学に女性はそんなにいなかったですよね。いまの中央大学では、3 人に 1 人ぐらいが女性なのですが、そこで先生の女性観というのか、その点を伺いたいと思うのですが。割と青春時代にそんなに女性に接していらっしゃいませんと、女性というのはこういうものだという固定観念みたいなものを持つ方が多いのですけれども、先生の場合には、そういうものをお持ちになっていないように思いますね。

阿部：ありませんでしたね。

北村：そうですね。先生の女性観というか、女性に対する見方っていうのは、一体どこで醸成されたのでしょうか。

阿部：私は、まさにフェミニスト、女権尊重論者ということになるのかもしれませんが、女権というよりも、やっぱり対母親観でしょうね。とにかく男ばっかり 4 人兄弟だったんです。昭和 14 年、私が旧制の

商業学校の 1 年生の時に、同じ商業学校の 5 年生だった長男の兄が急に亡くなり、ところが同じ年の 12 月に、今度は急性心臓病で父親が亡くなりました。当時、父が 50 歳。ひと回り違って母親が 38 歳。それで残された子供が 16 歳の次兄と 14 歳の私と 11 歳の弟。同じ年に長男と夫を亡くして、男の子 3 人を抱えることとなり、それから、がぜん母親が強くなったんですよね。

もう、しつけも厳しく、父が残した仕事を自分で継続しながら、田舎では非常に珍しいことですけれども、残った 3 人の子全員に、高等教育を受けさせたのです。従って、母親であり、父親であり、というような立場の母親だったんですよね。私が日弁連会長当時、平成 5 年、94 歳で亡くなったんですけれども、そういう母親の背中を見てきていましただけに、私は、まさに女権尊重というよりも、実は腹の底から言うと女性恐怖みたいなもの。対で話ができませんでした。

北村：女性恐怖。まさか、そんなことないでしょうね。

阿部：ということで、やっぱり女性とは強いもんだなあと、そういう意味で、やはり女性に対する信頼感をベースにした女性尊重論者です。

北村：私も昔の女性というのはすごく芯が強くて、忍耐強さも持っているというふうに思うのですけれど、最近の学生なんか見てますと、ちょっとそのへんが、欠けているかなあというような気がします。先生はいまの女子学生に求められるものとか、あるいは女子学生っていうのはこういうふうなものだというようなお考えはあります？

阿部：あまり女子学生と接していませんから、どういう気質なのかわかりませんが、でも少なくとも非常に生真面目な学風というのが中央大学にはありますよね。ですから明治の創立以来、これは大学の一つの学風ですから、そういう学風を是非、身につけてほしいと、そうすれば自ずと、地味ではあるけれども、堅実な女子学生として育っていくのではないかと思います。そこは非常に期待しているんですよ。

北村： 4 月下旬の内閣改造で女性の大臣も 5 人も出てまいりましたね。ああいう人たち、それぞれすごく個性豊かな非常に力のある方たちが出ていらっしゃっているんですけれども、やっぱり中央大学も将来的にはああいう形になるとみてよろしいんでしょうかね。

阿部：まったく、その通りになると思いますよ。

125 周年を中心軸に

北村：それで先生に座右の銘というか、何かそういうものを伺いたいと思います。

阿部：この間、私は南甲倶楽部に色紙を書いてくれといわれまして、いま、南甲倶楽部に飾ってあります。みんなが心を合わせて、志を合わせて、城壁をめぐらせたように堅固になるという言葉として「衆心成城」という色紙を書いたんです。仕事というのは 1 人ではできません。みんなで力を合わせて、やっと仕事ができるんだということを、いつも話しております。

北村：それは非常に重要なことで、先生が理事長になられてから 2 年になるわけですけれども、最近の中央大学の中を見ていますと、教学と法人との関係というものが、何か比較的スムーズにいっているなあと思います。その代わり、会議の数が多いですが、それもいろいろと詰めていっているなあという気がしているんですね。

とくに、これから創立 125 周年を迎えまして、いろいろと大学として、やらなければならないこともありますし、そこで、

最も中央大学でやろうと思っていらっしゃることとか、これを重視していらっしゃるということを少しお話しいただければと思うのですが。

阿部：理事会基本方針がございますでしょ。非常に先見性をもった事業計画も取り込んだ中で、大きな方針が示されていることは間違いないと思います。それを受け継いで、実行しているつもりです。しかし、私がみて、どうもなんか物足りない。つまり、そういう理事会基本方針を実行するとしても、先行き、日本もしくは世界の中で、この大学をどういうふうにもっていこうというのか、その行動の原理が見えてきません。1年経ってもどうしても物足りないようだったんです。確かに、高木総長は「21世紀は日本一の大学に」というふうなことを提案されておられた。しかし、日本一の大学のためには、どういうアクションプランを立てて、いつ頃どのように開花、発展させようとするのかという目標が見えてきません。

そのため、せっかく「理事会基本方針」を立てたんですから、この際、大学の将来の位置づけを見すえながら、これを強力に展開できるような行動原理を理事長が提言をし、それを全学的にご理解をいただいて、中央大学のビジョンとして掲げることが必要ではないかと考えました。

そこで去年の5月、市ヶ谷キャンパスの開校式の時に、行動原理として3つの提言をしました。さらに21世紀の中央大学を日本一の大学にとされた高木総長のお言葉に、もう1つ世界レベルでの存在感を加え、世界でも存在感のある大学にしようと提案させていただきました。市ヶ谷キャンパスの開校式に述べた3つの提言とは、第1番目が大学の知、学問の社会還元、2番目には実学による生涯教育の場の提供、3番目には世界レベルの交流を伴う高度研究機構の確立です。

そして同じく、この理事会基本方針と、その行動原理として3つの提言のほか、やはりそれを動かすには、大学全体の人の力と、施設の力であると思います。今般、評議員会の決定により、本学の125周年記念事業を展開し、今後10年間を通じて、そこで得られる大学の力、これが21世紀の発展のための大学推進力となる総合力だろうと思います。ですから、こういうふうに理事会基本方針と私の提言と、125周年の募金事業というようなものの3点を、まず中心軸に据えて、全学を挙げてお互いにしっかりと頑張っていこうと考えております。

背景としては、18歳人口減少問題、長期経済の低迷、ＩＴ化社会など。こういう社会事情も斟酌しながら、ここで21世紀の日本一、そして世界の中でも存在感のある大学にするための私の提唱として平成15年度の文武両道における優勝作戦という3ヵ年計画のタイムスケジュール、アクションプログラムにつなげてみたいと思います。そういう意気込みで、大学の運営にあたっていきたいですね。

北村：私、いまのお話を伺っていて、これは、教学側も考えなければならないなあというふうに理解したんですけれども。

商学部改革なんかも、改革をやる時に、ある特定の人からにわかに出てきた。つまり、多くの方々の支援と努力の結果があったのです。

例えば、商学部事務室にいらっしゃる人とか、あるいは教授会の各メンバーから、いろいろな意見が出てきたものが集約されて、その改革がなされたのです。きっと、そういう人たちで理事長に意見具申をしたいという人、いっぱいいらっしゃると思うのですが。

阿部：それは実際は、あるんですよ。

北村：先生、ところで 3 カ年計画の最後の 2003 年というと、中大水泳部のインカレ 10 連勝ということが期待される年でもあります。

阿部：そうですね。当面 3 年間でどれだけの動きをつくることができるかと、まずは短期でまとめてみようと。そうしないと、中、長期の展望が、何にも出てこないと思うんです。まずは、即戦的にやってみようと、ということです。

あくまで全国区展開

北村：ところで大学創立の 120 年というのが 2005 年ですね。120 年は一つの大きな区切りではあるんですけれども、これに対して特別に何かやろうということは、いまのところはお考えになっていらっしゃいませんか。

阿部：そこまではまだ。あくまでも 125 周年です。125 周年は大きな事業にしたいですね。平成 13 年、14 年、15 年と、この 3 年間の中で今年はここまで、来年はあそこまで行こうと、再来年はこういう形で仕上げようという、本学のすべての関係者がタイムスケジュールを出し合って、どんな小さなことでも改善していくなかで、それらを全部持ち寄れば大学の大きな力になるはずだ、と思っています。

北村：あとは、中央大学が将来どういう方向に行くかということに関連しまして、中央大学はいま、多摩地区が中心になっているのですが、よく教学側で議論されるのが、多摩地区にある大学ということと、それから全国型の大学として学生を集めていくものとの、その関係というか、そこをどういうふうに考えていこうかということがよく問題になるんですよね。

どういうことかというと、いまや首都圏の学生の入学者が 65 %という形にまでになってきてしまっている。中央大学の将来を考えたとき、日本一の大学にとか、存在感があるとかっていった時に、そこをどういうふうに考えていればよろしいでしょうか。

阿部：いま、本学を中心として多摩地区大学連合の動きが、地元の産業、自治体、つまり地域社会との関係で、大きな力を醸し出しつつあるということも重々承知しております。が、しかし、まさに北村先生がいわれたとおり、本校は地方の国立大学や地方の私立大学と違い、中央の全国型の大学ですから、従って全国区でなければいけません。

そのための全国区の展開がまず必要だというふうに思います。しかし、多摩地区にこれだけの大学が集まり、しかも名実ともに中央大学がリーダーとなっているということは、これは各地方に進出する、いわば発信源となって、大きな力になると思うんですよね。そういう意味でここを踏み台にして全国展開しないと、これはいけないことでしょう。ですから、これが始まりであって、先行きはやっぱり全国区展開だと思います。

商学部長

OBの協力不可欠

北村：いま、周辺の小学校から、学生をよこしてくれといってきています。クラブ活動などを、学生に指導してもらいたいと。あるいは、小学校数が少なくなってきて、教室なんかが余っているというので、ハードは提供するから、ソフト面を中央大学が提供してくれないかとか、いろいろな要望が地域からきているんですよね。

それを教学側はどう対応していけばいいのか。いろいろと検討が始まっていますが、これも地域の中でこれだけやっていこうとすると、大変な労力を必要とします。商学部も、割りと高等学校と連携をとってます。いろいろと連携をとるということになると、また、そこに行かなければならないとなると、教職員の負担が大変になってくるわけなのです。そのへんのお考えがありましたら、ちょっとご指摘いただければなあ、と思うのですが。

阿部：これは確かに教学、先生方の力をお借りしないとできないことですけれども、法人の方も、もう少し力を入れるべきだと思います。地方と中央との関わりを大学として、1つの戦略として組み込んでいくインターネットを駆使して組織的にどうだろうかと思いますが、どうでしょうか。

北村：そういうことですね。例えば地方地方にはそれぞれ学員の組織があります。例えば、いま学生なんかの出口の問題で、就職との関連でインターンシップという問題がどんどん検討されている。そのへん、企業との間で連絡をとったり、非常に有効な部分があると思うんですね。学員の方にどれだけの部分をお願いできるのかっていう、商学部ではOB・OG会を作ったのですけれども、それもひとつには、インターンシップなどをそこでお願いできないかと、学生向けに講演をやっていただく、キャリアデザイン・プログラムというのも最近やってますから、そういったような形のときは、卒業生の方たちに協力していただくというふうにしませんと、もう教職員だけでできる範囲のことというのは、限度があるんだろうなと思います。

地域社会との連携

阿部：大体、就職活動のため4年次の授業がかなりつぶされると、場合によっては3年次の後期ぐらいから就職活動のための時間を使うというふうなことですと、まさに今いわれたようにインターシップなんかは、どうしても必要です。そうすると、教学側における単位のことも考えたバックアップ体制がないと、なかなか難しいところも出てきそうです。

北村：教員と職員とOBを含めた大学の構成員全体を考えながら、動かしていく大学でなければならないのかなというような気がしているのですが。

阿部：最近、私は一部の学員会活動について、中央大学という絆だけをベースにした、仲良しクラブではないという動きが出ていることについて、大変感心もし、敬意を表しているのです。つまり現実そういうふうな動きがあるんです。特に藤沢白門会。ここなどは本来の委員会活動のほか、地域活動としての福祉、青少年教育、おまけに他大学との交流もやっている。そうした中で、しっかりと中央大学の価値を植え付け

ています。こんなことから、いま言われたような学生の受け入れ、あるいは優秀な学生の大学に対する送り込みというようなところあたりが出てくるといいなと思っていますね。

ですから入口も出口も絡んだ中での、学員会活動が期待されます。ただ入口となるといろいろ難しいところは重々承知しております。そのことが各地の学員会で、一番

不満とされるところではありますけれども、それは自己推薦制度とかいろんなことがあるわけですから、方法がないわけではない。ですから私は必ず、何らかの意味でいい学生に来てもらうためにも、そのために、いい学生を推薦していただきたい。そしてまた、出口においても学員会とも一緒に作業しながら、いい学生を地域から迎え入れるということ。そんなことを考えてますね。

北村：そうですね。なにかせっかく組織がありながら、いま、大学とは切り離された感じで、活動していらっしゃる部分があるということは非常にもったいないことですね。

阿部：ですから、単に仲良しクラブじゃなしに、大学と一体となって本当にそういう形であってほしいと思いますよ。

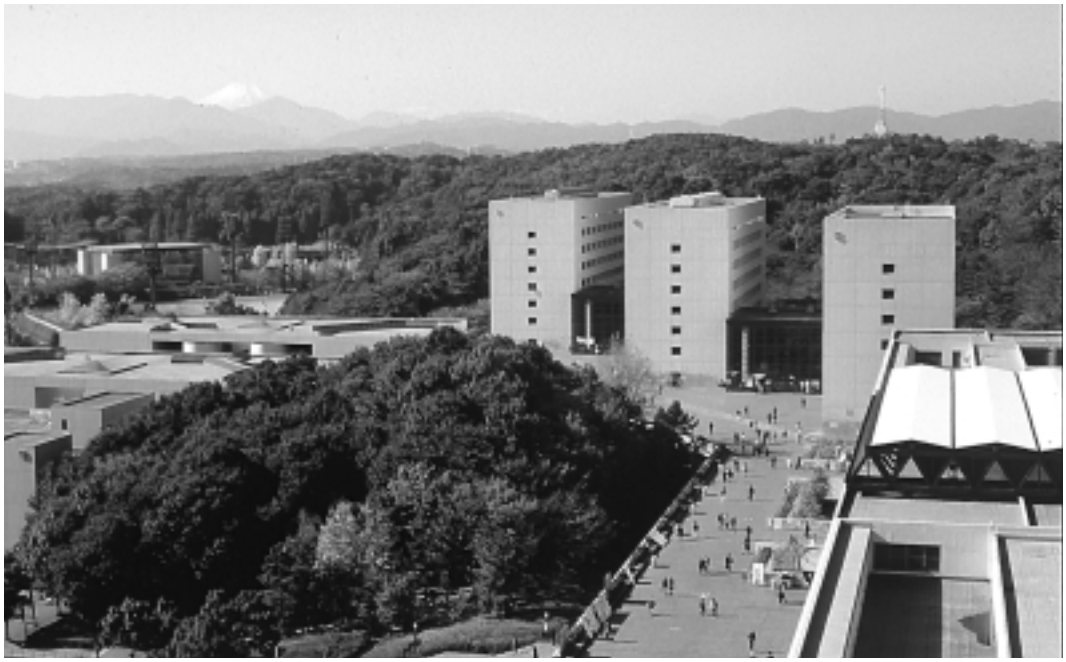
北村：そうすると、よく学員の方は大学に何をしてもらえるのかというようなことをおっしゃる場合があるんですけれども、私はこれからは大学に対して、自分たちは何ができるか、貢献をしてくださるようにお考えいただきたいと思うんですね。外国を見てますと、やっぱり卒業生の方が、こういうすばらしい学生がいると推薦してくるっていうのもあるわけですから、そういうものがない限り、いくらやろうと思ってもできないのではないかなと思います。

阿部：それぞれの地域によって、地域特有の事情を大学の方に知らせて下さるとか、あるいは、こういう場面で大学で力を貸してほしいと、つまり自分たちの村起こし、町起こしのために、こういうテーマのもとでやってみようじゃないか。ぜひ、ひとつ大学に協力して、まさに地域社会と大学との連帯関係が全国的に展開する。こんな姿を見たいものですね。

北村：そうなってくると、それこそ本当に存在感のある大学ですね。21 世紀の中央大学の未来像を示せる……。

阿部：幾つかのモデルケースを、例えば九州のこういう地区でこういうテーマについて地元の学員会主催で、地元の自治会、あるいは地元の産業等に、こういうスケジュールでこんな取り組みがあるとか、いくつかの目標となるものをつくって展開したらいいと思う。

北村：お話していることで考えていくと、中央大学というのは、学員、教職員一体となって、それに学生がそこに、どういうふうに関わってくるかという部分があるのかなと思うんですけれども、これもまた非常に難しい問題で、だんだん教学側では学生



の授業評価を取り入れて、学生の意見を聞いてやっていきましょうというようなことが行われているんです。私は理事長にも学生との接点をもっていただけるような、そういう機会があるといいなと思います。

また、私は総長代行としての先生にお願いしたのは、付属高校と大学との間の連携です。商学部などは外の高校との関係強化を割りとやっているのですけど、このところで「商学部は付属高校と、どういうふうにやっていらっしゃるんですか」なんていうことをよく聞かれます。現実に、あまりそのへんが詰められていないという部分があります。教学はこれから付属の先生方と話し合ってやっていこうということになっていますが、例えば、中学校をつくろうかというような案も一部に出てきているような時に、やっぱりそういうものも総長としておやりになっていただくところというのが、必要かなと思います。

阿部：今年の 2 月か 3 月だと思うんですけれど、3 高校の校長、教頭、事務長、それと法人の方との意見交換会がありましてね。非常にいいお話をたくさん聞けたのです。で、これを年に 2 回とか 3 回とか回数を重ねていく必要があるのじゃないかと思いました、と感想を述べたのですが、確かに必要だと思いました。

明るい質実剛健で

北村：質実剛健という中にも、何というか、活性化されたと言うのか、明るいというのか、一般的な言葉になりすぎるんですけれど、そういう大学になってくれればなあということなんです。

阿部：動きのあるね。

北村：そうなんです、そうなんです。

阿部：絵でも書でも死んだようなものがあります。やっぱり、そこにムーブメント、つまり明るいとか、伸びやかさがあるとか、躍動感といいますか、動きのあるものは絵でも書道でも必ずあります。すばらしいなと思います。本学をますます、そのような動きのある大学にしましょうよ。

（**お　わ　り**）